社会科教育

奈良県小学校教科等研究会
社　会　科　部　会
第　71　号

確かな学力を育む「見通す」・「振り返る」学習活動の工夫

奈良県教育委員会事務局
学校教育課指導主事　尾﨑　和弘

一　はじめに

学習指導要領では基礎的・基本的な知識・技能、これらを活用して課題を解決する思考・判断・表現力等の能力、主体的な学習態度、という確かな学力を育むために、「見通しを立てたり振り返ったりする学習活動」を重視することが示されている。

ここでは「見通す・振り返る」学習活動の充実を図る具体的な方法について述べる。

二　「見通す」学習活動の工夫

学習を見通すとは、子どもが学習問題を見出し、予想を立て、解決への計画を立てることだと考える。

⑴学習問題を見出させる

このような学習活動を展開するためには、まず、単元や毎時の授業の「導入」場面で学習問題を見出させる工夫が必要である。その例をいくつか紹介する。

①「なぜAであるのにBなのか」

「なぜ人口が増えているのにごみの量が減っているのか」という疑問から、「どのようなごみ減量の工夫や努力があるのだろう」という学習問題につなげられるように、複数の資料の提示・比較を通して、Aを比較対象としてBを調べる指導の工夫である。

②「AからBになるのにどのようなことがあったか」

「なぜ、丘陵地だった場所(A)が住宅に変わった(B)のか」「なぜ、地域のお祭り(A)が今も変わらず受け継がれている(B)のか」など「その間にどのようなことがあったのか」という疑問から「どのような人々のどのような働きがあったのか」という学習問題につなげられるように、複数の資料を比較させるという指導の工夫である。

また、「戦争に負けた日本(A)が19年後にはオリンピックを開催(B)した」から、「どのように日本は復興をとげていったのだろう」という学習問題を設定し、年表から調べる事象を見付けさせていくという学習も期待できる。

⑵予想や学習計画を立てさせる

学習問題を見出した子どもは、次に「きっと～だろう」と予想を立てる。そこから、それを確かめるための学習計画づくりが始まる。子どもが主体的に学習を進めるためには、学習計画が必要である。先述の地域に伝わるお祭りにおける「どのような人々のどのような働きがあったのか」という学習問題を例にとると、地域の人々の願いなどの「調べる観点」、それを古老や保存会の人々に聞き取るなどの「調べる方法」、また予想される調査についてどのような順番で調べていくかという「調べる順番」、さらに調べたことをどのようにまとめるかという「まとめ方」などといった学習計画づくりのための観点を示し、子どもに問題解決への見通しを具体的にイメージさせることが大切である。

三　「振り返る」学習活動の工夫

学習を振り返るとは、調べたことを地図や図表など、何らかの形にまとめ、そこから調べた事象の特色や社会的な意味などを考察することだと考える。

⑴調べたことを整理させる

例えば、調べたことを地図に整理することにより、地域における調べた事象の特色が明らかになる。年表に整理することにより、変化の移り変わりの様子が明らかになる。さらに、キーワードや写真、矢印や線などを用いた関係図で整理することにより、事象や人々の相互関係や原因と結果などの関係がよく見えるようなる。

⑵社会的事象の特色や意味を考えさせる

最後に、まとめた全体像から何が言えるのかという事象の特色や、自分たちの生活にどんな意味があるのかという事象の社会的意味を考えさせていく。このとき指導者は、その授業や単元の目標の達成を踏まえた具体的な発問を行うことが大切である。「気付いたことは何ですか」よりも「丘陵地だった場所のまわりで起こった変化は何ですか？」と問いかけることで、学習問題への答えもより鮮明になるだろう。そこから、子どもは地図などに整理した事象を関連付けたりしながら、学習問題に対して「つまり」や「例えば」などの言葉を使って自分なりの説明ができるようになる。「例えば、近くを通る○○線に□□駅ができたこと」「例えば、近くの高速道路に△△インターチェンジができたこと」といったその根拠となる具体的事実を表現したり、「つまり、その一帯の交通が整備され便利になったから」というように、事象の特色や意味を表現したりするようになる。

四　おわりに

このような、「見通す」・「振り返る」活動により、子どもは授業において「何を学ぶのか」「何を学んだのか」を実感する。これは、自己の学びや成長への自覚とともに「もっと解決しなければならないことは何なのか」「自分にできることは何なのか」という、また新たな見通しをも生む。このような発展的な学びの繰り返しが、確かな学力の育成はもとより、よりよい社会の参画や形成者に関わる社会科にとって大切な資質や能力を育てることにつながると考える。

第61回奈良県小学校社会科研究大会
学年別分科会での研究協議の概要

3年分科会

地域に受け継がれてきた文化財
―受け継がれる大柳生太鼓踊り―

奈良市立興東小学校
教諭　前田　明日香

【本実践における提案】

・太鼓踊りを保存しようとする方々の思いに触れることで、子どもたちの太鼓踊りへの感じ方が変わっていった。自分も踊ってみたい、自分たちの祭りであるという意識をぐっと高めることができた。

・調べる段階で太鼓踊りについてわかったことや疑問点を付箋に記入し、模造紙に貼っていくことで、一人一人の思いや考えが明確になり、得た知識を整理することができた。また、ふり返りシート（毎時、太鼓踊りは○○だという形式で記入）の活用で児童の考えの変容が明らかになった。

・「休止している太鼓踊りを、あなたならどのような方法で復活させたいか」という課題設定のもとでねり合いをしたが、学習で得た知識をもとに意見を考え、自分たちにできそうな内容で意見を交流することができた。太鼓踊りを自分事として考える児童が多くなり、次のポスター作りへスムーズにつなげることができた。

分科会での提案の様子

【研究協議から】

・今回の学習を、今後どう生かし、どうつなげていく予定なのか。

→興東里山祭りで子どもたち用にアレンジした太鼓踊りを披露した。しかし、統合校であるために、大柳生に古くから伝わる祭りだけをクローズアップして取り組む難しさもある。今後どうしてくかは、本校にとっての課題である。

・地域からの反応はどのようなものだったのか。

→今回子どもたちが踊ったことによる地域の方々からの反響は大きかった。保存会の方も、また機会があれば子どもたちに踊りを見せたいとおっしゃった。指導者として、太鼓踊りを取り上げた授業を計画してよかったと思っている。

【指導助言】

奈良市立吐山小学校
校長　西岡　敏彦　先生

・ふかめる段階の課題設定により、子どもたちの追究意欲や課題意識をより高めることができた。さらに、ひろげる段階で作成したポスターを通して四～六年生へ啓発することで、三年生として、参画活動への第一歩を踏み出せたのではないか。地域の公民館などにも掲示すれば、より多くの方々へも発信できたのではないか。

・ゲストティーチャーの活用は、人の営みに直にふれる大切な取組である。今回の実践で、保存会の山中先生との出会いは、子どもたちにとって大変大きな意味があった。

・研究仮説を立てれば、根拠をもった検証をする必要がある。授業記録をとり、形成的な評価を行うことは、有効な手段である。情意面だけでの指導に終わると、子どもたちの社会認識は培えない。今回の指導は、授業記録がきちんと残されていて、ふり返りシートを使って子どもたちの考えの変容にも着目できていた。

（村立明日香小学校　川口　雅哉）

4年分科会

水害からくらしを守る
―大和川が流れるまち王寺―

王寺町立王寺小学校
教諭　廣瀬　信彦

【本実践における提案】

今年八月、台風十一号により大和川が増水し、避難勧告がでた地域があった。そこで本単元では、一般的に火災が多く取り上げられるのだが、より自分たちの身近なものとして考えるために水害を取りあげた実践である。

校区にある大和川が昭和五十七年にも増水して甚大な被害を受けたことから、王寺町ならではの教材として扱った。まず、写真を見て学習問題を設定し、消防署や備蓄倉庫の見学・役場の方の話を聞き、新聞にしてまとめた。次に、水害により被災された方のお話を聞き、「水害からくらしを守るためには、何が大切か」「自分たちにできること」を考えさせ、協力し合うことの大切さに気付かせた。ねり合いは、「一人」→「グループ」→「全体」の流れで進め、毎回のワークシートや振り返りにより知識の習得状況や考えの変容を理解することができた。また、見学・ゲストティーチャーから水害を身近に感じ、自分事と捉え、社会に対して将来、実践できる具体的な活動を考えることができる力がついたと考える。

【研究協議から】

・子どもたちが身近に感じ、地域の方により興味が高まった。

・「ねり合いとひろげるが似ている」の質問に対して「ひろげる」の前にハザードマップを見せたり、ライフラインの話をしたりなど工夫した」との応答があった。

・「ねり合いでの評価は」の質問に対して、「活動により自分ごとのように考えていればA」という応答があった。

・「具体的知識を身に付けるための指導は」という質問に対して、「キーワードをまとめて全員で確認。わからないところは内容も確認した」という応答があった。

・関連諸機関についても、しっかり勉強させていかないといけない。

分科会での提案の様子

【指導助言】

広陵町立広陵北小学校
校長　西井　康浩　先生

・水害を取りあげていただきよかった。知っている人にとっては生きた教材。

・これからも水害の資料を作ってほしい。

・子どもたちの興味がわく体験活動も必要である。

・家族に聞いてくるなどの主体的な調べ学習があってもよかった。ねり合いのときに違う材料

としてでてくるかもしれない。
・調べる・みつめる段階で参画する力の芽はできているが整理できていない。ねり合いで整理し、友だちの意見を聞いて、増幅していくとよい。
・どういうことをテーマにして、ねり合わせるのか大切。また、初めての資料提示によるねり合いがあってもよい。
（名柄小学校　福岡　真耶）

5年分科会

これからの食料生産
―これからの日本の食料生産はどうあるべきか―
田原本町立南小学校
教諭　浦本　諭

【本実践における提案】
「みつめる」段階では「何故」を考えることで疑問や意欲がでてくると考える。食料品の産地を調べ、自給率を掲示すると「何故、日本は自給率が低いのか。」という疑問が出た。
「しらべる」では、外国産の大量生産や安全性への疑問が子どもから出された。トレーサビリティーについてゲストティーチャーからはファックスでの回答になり、人の営みに学ぶことが不十分であった。
「ふかめる」段階では、事前に自主学習として課題について自分の考えと理由をまとめさせた。ノートに資料の読み取りで分かったことを自分の言葉で記入することを続けてきたのでうまくまとめることができた。ねりあいを深めるために説明の仕方や話し合いのルールを掲示したため意見は出たが、意見のぶつかり合いにはならず自分の意見を言うだけになってしまった。
「ひろめる」では、家の人に自分の考えを伝え、意見を聞いた。子どもが深く考えたことに、どのような反応があるかと行ったが、ひろめるということでは課題が残った。

分科会での提案の様子

【研究協議から】
・イギリスの自給率の改善について考えていく方法もあったのではないか。
・近畿農政局の方にファックスで回答を得たということだが、そこにトレーサビリティーへの思いや願いなどはあったのだろうか。
・深めるために今回は対立的思考から取り組んでいったが、こういう条件を付けたらうまくいく(留保条件)という方向から考えさせてもよかったのではないか。
・ねりあいを深めるためには、今回のテーマは大きすぎたのではないか。既習の米・農業・水産と諸外国との関係から「食料生産はそうあるべきか。」を考えさせる方法もあったのではないか。

【指導助言】
奈良市立佐保川小学校
校長　木村　旬一朗　先生
・目新しい言葉で興味をひくことは大切だ。言葉の意味は観念的にわかっていても、自分事としてとらえさせることが大切である。
・近畿農政局の方や牛に出会えなかったことが残念に思う。時間的に厳しいと思うが人の営みに会わせたい。会うことで何を子どもに伝えたいのかを綿密な打ち合わせで伝えておくことが大切だ。
・社会的事象を他人事から自分事にするためには、人と出会う場面の設定の仕方が重要だと考える。感動体験により子ども自身が自分事に引き寄せていく。
・キャリア教育としても考えられる。社会を見つめる目を育て、これから消費者として生きていく姿を考えさせるきっかけになる。社会の一員として考える場面を仕組んでほしい。
（真美ケ丘西小学校　嶋田　倫代）

6年分科会

わたしたちのくらしと憲法
―日本国憲法のめざすもの―
桜井市立桜井小学校
教諭　東　香奈

【本実践における提案】
「普段わたしたちは、日本国憲法を意識して生活することはほとんどないが、今の生活はすべてこの憲法の考え方をもとにしているものであり、児童の生活とも大きなつながりがある。」本実践では、「日本国憲法の基本的な考え方を理解し、自分たちの生活にどのように影響しているのかをねり合い、自分たちの生活とのつながりに気付くことで、社会にかかわろうとする児童が育つ。」という研究仮説を基に学習を進めることが、よりよい社会の形成に参画する力を育てることにつながると考えた提案であった。

授業の様子

【研究協議から】
・憲法や政治単元を子どもたちが、少しでも身近なものとして考えることができる事例の一つとして学ぶべきところが多かった。
・子どもたちがどれだけの知識をもち積み上げて臨めるのかが、ねり合いのポイントになってくる。実践ではしっかりと根拠を基に意見を述べ合っている様子が伺えた。
・社会科ではねり合う活動を大切にし、自分の価値観をどこに定めるのかを身に付けさせる活動が必要である。知識を身に付けることも大事だが、自分の価値観をみんなの前で言えることも重要である。

【指導助言】
奈良県県教育委員会学校教育課
指導主事　尾﨑　和弘　先生
・内容的には難しいものであり、すでに答えが出ている学習でもある。答えのない学習課題を問うことも、今後の課題ではないだろうか。しかし答えのない問いでも、クラスとして話し合った結果を答えとして出してみようという進め方もできる。
・自分の考えをまとめ、自分で考える時間を保証するのが時間的に難しいことがよくある。これからも考える時間を確保し、個人の考えを大切にしてほしい。
・学習のいたるところに言語活動があった。意見の分類、自分の立場の明示、個人間の対立、これらをうまく活用していた。それらを受けて確かな知識に基づいた自分の考えを最後に出すことができていた。
・子どもたちに常に正解だけを問う発問ばかりしてはいけない。答えがあるなしに関係なく、「なぜ、どうして」を出させることが大切である。
（大宇陀小学校　峙　尚宏）

第52回全国小学校社会科研究協議会京都大会
第61回近畿小学校社会科教育研究協議会京都大会

第52回全国小学校社会科研究協議会京都大会
兼　第61回近畿小学校社会科研究協議会京都大会に参加して

王寺町立王寺小学校
教諭　立部　秀樹

11月6日と7日に第52回全国小学校社会科研究協議会京都大会が開催された。大会主題は「子どもがひらく社会科学習～人に自分に問いかけ社会への貢献を見つめる問題解決的な学習の展開～」である。一日目は京都国際会館で全体会があり、京料亭・山ばな　平八茶屋の園部平八さんから「和食の文化・伝統と京都人(日本)の心」と題して、講演があった。また、大会主題提案に対する指導講評を文部科学省教科調査官澤井陽介先生がされた。澤井先生は社会科授業の決め手は「問題」と「解決」であると言われ、中でも「解決」のための学習内容は問題を解決する過程で児童が調べたり考えたりして獲得・理解するものであるとも言われている。二日目は京都市内3会場で授業公開、学年別授業研究会、学年別課題研究会が行われた。そのうち、学年別課題研究会において、奈良県小社研4年部会の提案として、「奈良県の特色ある地いきの人々のくらし～和紙作りのさかんな吉野町～」の実践を報告した。本実践では、自分たちが住む地域とは異なる地域の伝統的産業である和紙作りの盛んな吉野町に出会わせ、体験的な活動や人を通した学習によって、和紙作りの盛んな吉野町についての理解を深め，吉野町の和紙作りを自分事としてとらえられた。そして、学習問題を解決していく過程で新たに見つけた課題を「ねり合い」によって解決させられた。参加者からは、「ねり合いによる課題解決とはどういった形か」や「和紙作りを残そうとすることが社会参画になるのか」などの質問が出された。指導助言の御所市立名柄小学校秋元直樹校長先生より、今までに学校として継続的に取り組んできた紙漉きを教材として扱うことの学習効果や、ゲストを招聘した活動により人の営みを通して学ぶことができること、また、伝統的産業を直接的に支える人や間接的に支える人など個人を焦点化せずに全体を捉えられるようにすることが大切だというご指導をいただいた。

奈良県社会科副読本「奈良県のくらし」小学校マルチメディア教材「奈良県のくらし」活用について

奈良県の地域学習に活用していただいている「奈良県のくらし」「指導の手引き」では、できる限り最新の資料を掲載し学習できるように年度ごとに部分改訂を行っています。（H26年度版は裏表紙の右下に⑥の記載）

先生方に配付させていただいている同指導の手引きの中にある小学校マルチメディア教材「奈良県のくらし」（以下、マルチメディア教材）を紹介させていただきます。

マルチメディア教材の特徴
児童の興味・関心を高める教材
◎写真・資料が豊富
◎工場見学・インタビューの動画をみることができる。
○クイズ形式で学習できるページもある。

マルチメディア教材へのアクセス
①奈良県立教育研究所ホームページ
②トップページ右下小学校学習教材「奈良県のくらし」をクリックします。

豊富な写真や動画で児童が視覚的に学習を進めることができるのがマルチメディア教材の利点である。実際に見学に行けない場合でも、その地域の様子やそこでくらす人々の様子を写真や動画で紹介している。見学に行っても見られない違う季節や時間帯の様子の他、見学に行っても見せてもらえない場所についても見ることができる。また、インタビューが用意され、その地域の人の話が聞くことができる。教室でのインターネット環境が整ってきています。ぜひ有効にご活用ください。

⇦「奈良市の墨づくり」のページより

奈良県教育研究（http://www.nps.ed.jp/nara-c）
マルチメディア教材「奈良県のくらし」より

○作業の工程を職人さんの手元のアップで丁寧に紹介されている。
○墨づくりの歴史や児童が使用する墨汁のことまで学習することができる。
○内容によっては，作業の動画をみることができる。
○授業の説明だけでなく，調べ学習にも活用できる。